

第2回伊予市図書館・文化ホール等管理運営アドバイザー会議 会議概要（無記名版）

日 時：平成30年7月13日（金） 10時00分 ～ 12時00分

場 所：伊予市役所 4階会議室

出席者：アドバイザー会議委員7名、事務局4名、委託業者2名

配布資料：資料① 第2回伊予市図書館・文化ホール等管理運営アドバイザー会議
議事次第

資料② 伊予市文化交流センター条例の主な内容について

資料③ 第2回伊予市図書館・文化ホール等管理運営アドバイザー会議資料

資料④ 明石市立図書館視察メモ

1. 開会

- ・ 委員長挨拶（委員長）

2. 議題

（1）伊予市文化交流センター条例・伊予市立図書館条例について（報告）

- ・ 配布資料②に基づき、伊予市文化交流センターと伊予市立図書館の条例について説明。
（事務局）

（2）管理運営実施計画における事業方針とこれまでの検討振り返り

- ・ 配布資料③に基づき、管理運営実施計画における事業方針と計画の振り返りについて説明。（事務局）

→ 現在は、プレイベントの一環として、アウトリーチの動きが積極的である。市内団体に協力を頂きながら、市内の小中学校を対象とした、新施設のPRを行っている。5月に小学校を1箇所、近日だと7月4日に中山小学校でも行った。伊予市のゆるキャラであるみかん丸と一般市民の方と一緒に掛け合い形式でのPRや扶桑太鼓さんのパフォーマンスなどを行ったが、新施設でやる事業のイメージを伝えられたと思っている。

これから行っていく事業として、参考となるイベントについては、一昨年前に実施したまちクエストというものがある。これはまち全体を巻き込んだ地域活性化を目的もひとつある。市内の商店街の色々なものや寺社仏閣等を巡って、スマートフォンを使用して、各スポットでクイズを答えるITを活用した企画であった。この企画の拡大版のような、伊予市全体を使った企画ができれば良いと考えている。

新施設の事業にご協力頂きたいと考えている団体の一つにふたみ読み語り隊がある。読み聞かせのグループで、子どもも大人も一緒になって活躍されているグループであ

る。ふたみ読み語り隊の皆さんは地域資源を調べて、それを絵本や紙芝居、動画で PR して下さっている。市内全域にこういう活動が広がっていくよう、新施設がハブ的な役割を担えたらよいと思っている。

その他にも、現場見学会を検討している。実施時期としては、11月で進めている。

前回のアドバイザー会議で、新施設のボランティア活動などの市民参画についてのご質問があったが、現図書館でものボランティアの輪が広がっていて、新施設でもその活動を引き継いでいきたいと考えている。今後、新施設にかかるボランティア活動をどうしていくか、その受け皿の整え方については、検討していきたいと考えている。(事務局)

(3) 人材育成講座について

- ・ 配布資料③に基づき、人材育成講座について説明。(事務局)
- ・ 参加者の意見を聞きながらワークショップ形式で、講師が喋ることは最小限にし、皆さんとの対話形式で展開する。進め方についてご意見があれば是非お願いしたい。(委員長)
- 参加型とあったが、講座で検討した企画アイデアが実際にイベントとして形になるような可能性はあるのか。また、どのような方が受講してくれるのか、参加者がいるのかという点が非常に重要で、想定としては受講者をどう集めようとしているのか。また、開館後にこの参加者たちはどのような形で関わってくるのかについて、イメージを持っておかないと、参加者も自分が新施設にどのような形で関わることになるのかが分からず、モチベーションにも繋がっていかないように思う。(委員1)
- 参加者については、アウトリーチにご協力いただいている扶桑太鼓さんもそうだが、そのような市内の文化活動団体、文化協会の方々を中心とした人たちに声掛けをしながら、このイベント企画講座に関わって頂き、どれぐらい自分たちが新施設でイベントをやりたいのかを把握したいと考えている。

市民の方々自らの手で企画し、最終的には実施して頂きたいと思っている。実施については、通年の貸館事業はもちろんであるが、そのスタート前に市民のよるお試し事業を検討しているので、その期間も活用して頂きたいと思っている。

イベント実施者のお手伝いなどをやりたいという方も中にはいらっしゃると思う。そのような方々にもこの講座に参加していただき、まずはこの講座を通して、イベント実施までにどのような作業や関わり方があるかということを、段階的に知ってもらいたいと思っている。

現在、市民実行委員会が立ち上がっており、概ね月に一度の会議を実施し、オープニングの企画をご検討されているようである。その会の情報を市側にもご共有いただいたり、相互に相談したりしている。(事務局)

- ・ 既に、市内の文化団体や文化協会に関わっている人を中心に募集をするのであって、

広く一般市民に向けられたものではないということか。(委員1)

- 広報について申し遅れたが、広く一般にという点では8月号の広報誌に載せて募集をしようと思っている。とはいえ、一番は口コミでの宣伝だと思っているため、文化協会をはじめとした団体を心に声掛けはしていきたいと思っている。また、夜の回になったがゆえに子どもが参加しにくいという面があるが、これとは別に、小中高にも声掛けをし、何かしらの形で参加してもらう機会も必要だと思っている。(事務局)
- ・ 少し付け加えると、そもそもこの講座をやろうと言い出したとき、一つは文化協会の人に声掛けをし、文化協会の方にご参加いただかないと核になる人たちがいないと考えていた。そうは言いながらより多くのまだ我々が知らない、関心を持ってくださっている人たちで、知りたい・参加したいと思っている方たちに届けたいという気持ちは確実にある。その方たちが人口3万7千ぐらいの街の中で、まずは3人でも参加者がいればいいと思う。

2014年からワークショップを重ねながらこの施設を考えていたときに、中・高校生団体に参加頂いて、我々では思い付かない面白いことを話していて、それが皆さんの施設をつくろうという気持ちを後押ししたというのは確実にある。そうした次世代を担う若者たちには、たちまち実施までに至る事業とはいかずとも、施設をおもしろくするための様々なアイデアやヒントを頂きたいと思っているし、いずれは実施に向けた取り組みもじっくりと実施できればよいと思っている。一方で大人たちには、一生懸命お金の計算をし、企画書を書くというノウハウも身に付けていただきたいと考えていて、一つのイベントが成り立つまでの大変さや、実施のアクションに繋がるような話ができればよいと考えている。

今回は夜の講座になるが、いずれもう少し参加しやすいプランを考えたいというのが今後の課題である。その入口が、事業計画の中にあった施設見学会等であってもいい。この後、講座は1回きりで終わるわけではなく、多い施設は1、2年に1回とか同じ講座を繰り返すなどを検討した方がよいかもしれない。もう少し高度なことを学びたい人と初級編の2本立てなどもおもしろいかもしれない。ある施設では3年サイクルで繰り返す。初級編、中級編、上級編として、3年で1回完結させ、また次の年は初級編からやるというところがある。その中で館の運営の中心に関わってくれる方が、例えば20人受講して1人でも構わないと思う。19人の方が、これだけいろんなことを学びながらやっている市民がいるということ、また、こうした手順で行われているということ、より多くの市民の皆さんに知っていただく、関心持っていただくということが大きなことである。(委員長)

- これまでの話の流れの中でもこういった公共の施設をどう使っていくのか、自分たちが楽しみたいから使うということも、もちろん必要なことだと思うが、それによって街全体がどう変わっていくのかという視点が重要。このような企画書を書くというのは事業の内容とともにそれがどのような効果を持つのかということを明確にすること

が重要になってくる。国や民間の助成金など、そういったことについてもきちんと理解をしてもらう、意識付けのきっかけになるのではないかと考えているので、その方針で進め、委員長もお話したように、これまで文化事業をやったことが無い方、別の視点からこのホールや図書館を活用して何かやってみたい等と、新しい事業がここから生まれることに期待したい。(事務局)

- ・ 他に何かご質問はあるか。特に子どもの参加について、各委員からは是非この段階でお話をお伺いしたい。(委員長)
- ・ 将来的に、例えば、地域に貢献する講座等の伊予市文化交流センターを活用した開放講座を開催して頂きたいと今感じた。期待している。(委員2)
- 実は管理運営の基本計画のときにも、地域の作業に寄与する作業で、広く街づくりを含むようなことに寄与する施設にしたいという話はずっと出ており、委員2のお話はまさにとおりだと感じた。むしろ我々も学生たちから学ぶことが沢山あると考えている。(委員長)
- ・ 前回、中学校も活用したいということでお話ししたが、この企画講座の3回、私も参加してみたいと思った。(委員3)
- できれば通して参加していただきたいが、1回目だけでも是非参加してほしい。(委員長)
- ・ そういうところを出た結果を、例えば学校や市民に知らせていくためにどのような策をお考えか。ポイントだけでも結構だが、報告を兼ねて情報発信が必要だと考える。(委員4)
- 結果については今のところ考えていなかった。広報誌は難しいかもしれないが、ホームページ等での情報発信からはじめて行きたい。(事務局)
- ・ プレスリリースを作って県内の各メディアに広報してはいいかがか。記者の方々は記事を探しているので、結構掲載されることがある。それをやり続けることが、新しい施設の情報発信に繋がっていく。市の広報より効果があることもある。(委員長)
- フィードバック等でも、以前から情報発信はすごく弱い部分だと思っている。ようやく新施設のページができたところなので、それらも活用したい。経緯を知らせつつ進めていかなければ、せっかくの講座も、皆さんに興味をもって頂けないと思うので、それはまた御指南して頂きながら進めて行きたい。(事務局)
- 私のいる図書館でも広報が弱いので、県のプレスリリースを結構やるが、なかなか簡単には行かない。早目早目の戦略が必要である。(委員5)
- 当施設のアドバンテージとしては、新設であることである。ただでさえ注目を浴びる要素があるので、それを活用したいところである。(委員長)
- ・ 小学生の皆さんだとどうか。(委員長)
- アウトリーチやワークショップを他の事業と合わせて、「アウトリーチでこういうのを見た、では君たちもこういう風なことができるよ」、と小学生に夢を与える形の講座を、

定期的にともやってほしい。将来的に今の小学生、中学生たちが中心になると思うが、社会参画というのは子どもたちが身に付けるべき能力だと思うので、そういうきっかけをつくってもらえると非常にありがたい。きっと、地域おこし協力隊の人たちなどはこの講座には絶対出たいのではないかと思う。そういう気持ちを持っている人沢山いるため、いい企画だと思う。(委員4)

- 個人的に、子どもには、施設でしたいことなど、機会を作って夢を語ってもらいたいと思っている。そのうちのいくつかでも実現したものと良い。(委員長)
- ・ 他に何か人材育成講座に関して、アイデアや意見はあるか。(委員長)
- ・ 流れはすごくいいと思うが、新設が既得権の場になってはいけないと思う。今活動をしている方々は、ある意味、放っておいても活動してくださると思う。新しい人や活動を掘り起こすことが大事で注力すべきであり、その新しい活動がアピールできないことには、この施設のコンセプトそのものが弱まってくる。市民がつくる今後の街のあり方やみんなで共感・共有できるコンセプトがあり、それに対して市民交流センターが担う役割や実施すべきことが見えてくるのではないか。みんなのためにやるということがすごく大事なので、公益性を考えたときに、そこで市民が果たすべき新しい役割に気付いていく仕掛けができると良いと思う。

そういう意味では、先ほどまでにあったような子どもたちが感じてやっていける施設をつくることはすごく大事だと思う。ある意味、大人はその活動を外で見守っていければいい。その新しい動きをどのように起こしていくのかというときに、この3回の講座だけでは足りない。設計時よりワークショップ重ねてきて、色んなアイデアや種を市民から頂いてきた。今回の企画講座で、市民ニーズについても把握すると仰っていたが、今まで頂いたアイデアを元に、こちらからテーマを設定して、企画を仕掛けていくことも、今まさに必要な段階にあるのではないか。坂の上の雲ミュージアムをつくるときに、市民塾を3年くらい掛けてやってきた。そこで色々な種が生まれてきていて、その種が育ってきているという流れも少しあるようだ。そういうところで、新しいものを生み出して行って、市民の皆様がみんなの場だと思えるような空間にすることが大切である。放って置いては、新しい芽はでないので、こちらから仕掛けていかないといけない。(委員6)

- 私も関係者であったが、坂の上の雲ミュージアムは結果として、その目的は果たされず、その意思を継ぐ講座が現在行われていないが、きっかけづくりという意味では成果を出したのではないかと思う。文化施設で最近、プロ市民という言葉があるのですが、プロ市民には2種類あって、一つは市民活動をやっている人たちが、自分たちはこの施設を使うと決めている人たちのことを言う。文化協会の立場は割とそれに近い。もう一つは、プロモーターであり、プロモーターも市民である。プロモーターが持ってくるような、良質なイベントを開催するというのも市民にとっては刺激になると思う。一方で、配慮が必要でこの人たちと競合すると上手くいかない。この人たち

が活躍すればするほど、他の市民は私たちに関係ないというスタンスになっていくという話も、他の街で出てきている。ある程度のコントロールが必要である。既にこのプロジェクトに興味がある人たちではない新規の人たちが参加してくれるイベントを行うことも大切なことのひとつだが、プロモーターと呼ばれる人たちが一役買ってくれることはある。ただ、文化協会の人たちやプロモーターのどちらかだけが独占しているような施設や運営などではいけないし、バランスは大切だということは申し上げておく。どこの施設も市民参画でやって立ち上げが熱心だった所ほど、その市民が既得権になってしまって、そのまま運営委員会や企画会議でずっとその人たちがどんどん歳を重ねていってしまう。新しい人が入りづらくなることになるので、新陳代謝するように少しずつでも新たな人たちが入ってもらえるような仕組みにしていきたい。

プロ市民と言われる人たちを敵に回すと運営ができないが、同時にその人たちだけとやると、どんどん閉塞していくことがある。公益性をどのように確保していくかが大切である。

まずは、この3回の成果を整理する必要がある。どんな方が参加して、どんなことに関心を持っていたか、どこが足りないのかということに関して、振り返りが大切だと今の話を聞いて感じた。(委員長)

- ・ 恐らく3回目に色んな企画が上がってくると思うが、“これは”という企画が出てくると面白い。それを生み出す工夫ができたらいと思う。もう一つは3回目の後にくる、実際にやってみる際のサポートが大切だと思う。そのサイクルが回ってくると、上手くいけばPDCAのサイクルに乗せられるのではないかな。応援の仕方みたいなところがあればいい。もっと言うと、支援の仕組みがあって、これはみんなで応援していこうといった投票等のあり方が出てくると、講座だけで終わらず、講座が手段になり、その次にやるのが目的になる。この講座を目的化してしまうとそれで終わる。そこを手段化していく取り組みが見えるといい。(委員6)
- 茅野市民館の例でいうと、最初は事業企画の講座を1クールやって、次のクールのときには企画を実現させる。最後まで市民がやりきる。お金のことに関しては共催の形にして施設使用料は免除する。その代わり、チケットを売ってギャラを払って、というところは主催者、つまり市民に責任があるという形にして、イベントを実行するという苦難も含めて実感してもらおうというプログラムをやった。それが結果的に成功した理由は、どうしてもやりたいことがある熱心な市民がいて、その人が死に物狂いで動く、それに他の市民がついていく熱意があったということである。そのシステムはつくるけどそれに市民が盛り上がりえない街もあるのが正直なところである。とにかく、3回の講座を通じて、市民の皆さんが新施設にワクワクしてもらい、楽しいことを考えてもらえるように、まず試みに、講座をやってみようということである。(委員長)
- ・ 今回の講座は企画書を書けるようになるといったものだが、当然予算の話にもなるだろう。仮に共催などで、施設使用料や技術スタッフの部分が免除になったところで、

どうしても他の制作費にお金がかかってしまうので、どこかから工面するしかない。
助成金などをどうやって取ってくるかなども講座の内容として入れていただきたい。

(委員2)

- 企画書が、助成金を取るのに耐え得るところまでの内容が書けるといいと思っている。
公益性、公共性がない限り、助成金は取れない。こんな素敵なアーティストがいるので公演しますといった目的だけと、それは自分がやればという話になり公的なお金はもらえない。それは行政、国であれ、財団であれも変わらないので、そのことを意識した企画書を、今回の3回だけでは無理かもしれないが、目指して行きたい。(委員長)
- ・ できたものを評価するということが大事で、広島カープの応援をしたい、というだけでは共益なので、それは広島カープ好きな人だけの事業になる。だが、広島カープの応援を通じてスポーツの振興を図りたいと言うと公益性が出てくる。そこが目的になると応援の仕方が変わってくる。ある個人がよく頑張った、ということだけでなく、沢山の人の共感を呼ばないと公益性のある事業と言えないし、新たな施設でやる価値も薄れてくる。自分がやりたいことに対しどう共感を呼んでいくか、というのが公益性の表れみたいなのところがある。そういうものをうまく指導、実現できていければいい。(前田委員)
- 一方で、どうしてもこれやりたいという強い思いが原動力で活動を行っている市民もいるので、そのどうしてもやりたいという思いを、街にとってどういう意味があるのかというのを同時に考えてもらって、公共施設でやる意味に繋げたい。(委員長)

(4) 事業に係る今後のスケジュールと企画運営会議について

- ・ 配布資料に基づきスケジュールの説明。(事務局)
- ・ 何か質問はあるか。(委員長)
- ・ 市民ホール部分に関して言うと、2019年8月のプレオープンから翌年の3月まで、お試し事業はあるとはいえ、市民に貸出をしない理由は何か。(委員3)
- プレオープン期間は、施設の運営者側の習熟期間にしたい。しかし、それまでの間は何もしないというわけではなく、見学会や市の主催事業などは行っていく。(事務局)
- ・ 地域交流館は、図書館と同様、8月から一般の方に貸館を開放、共有開始ということで自由に使っていただけるという認識でよいか。(委員3)
- よい。文化ホールだけは、条文上、2020年の4月までは伊予市が建てた施設ではあるが、文化ホールとしての位置付けではない。あくまで市の事業としてじゃなければ使えない為、市民が市民の活動で自由に使うことができるのは、2020年4月からということになる。ただ、市民によるお試し事業というものは計画している。市の主催(共催)として2020年から市民の方に使ってもらうための試行という位置づけで実施していく。(事務局)
- 文化ホールに関しては、予期せぬハプニングが実際に起こるため、試行期間は設けた

方がいい。またスタッフが習熟する為にも試行期間は必要である。(委員長)

- ・ 企画運営会議について、配布資料の説明。(事務局)
 - ・ 例えば、市と学校の間でイベントの日程などが内々に決まっても、手続としてきちんとこの企画運営会議を通すということになる。新しい施設は色んな団体が使いたいで、こういう理由でこういうイベントを選びましたということが市民にきちんと説明できることが大切である。(委員長)
 - ・ 選考メンバーについての提案がある。会議を実施する時期には舞台技術委託業者と図書館の司書も恐らく決定しているため、舞台技術系の人と司書の方は入れるべきではないか。(委員長)
- 舞台技術業者は入って頂こうと思っていた。また司書も専門職なので図書館のプロとしての意見はあった方が良くと思う。(事務局)
- 他に質問がないようなので、次に移る。(委員長)

(5) その他

- ・ 愛称募集について、7月2日から7月31日まで募集をかけている。市内外在住を問わずどなたでも公募可能であり、電子メール、FAX、はがき等での受け付けも全国から行っている。応募箱は市役所の総合案内と伊予市内の各地公民館に応募箱を置いている。それとは別に応募チラシが7月の公募と一緒に各家庭にも先行配布しており、昨日の時点で電子メール、FAX、はがき等で来ているのが34件。このほとんどが四国外の関東や信越の方から来ている。市内に置いている応募箱の方はまだ開けていないが、10数件入っている声も聞くので、締切りまでには多くの応募があることを期待している。今後の流れは7月の募集終了後、8月中に別途選考委員会にて公募作品を5点程度まで絞り、その中から9月中に伊予市内の小中学生の投票により最終決定をする計画になっている。(事務局)
- Facebook でシェアするなど委員の皆さんにも広く宣伝頂きたい。(委員長)
- ・ 配布資料④に基づき、明石市立図書館の視察について説明。(委員長)

3. 閉会

- ・ 時間となったため、閉会とする。(委員長)

以上